

初期デリダにおける「素朴さ」の主題

——オイゲン・フィンクによるフッサール解釈との比較から——

The Theme of “Naivety” in Derrida’s Early Works Compared with Fink’s Interpretation of Husserl

小川 歩人 (Ayuto OGAWA)

Abstract

Previous researchers have often said that the methodological paradoxes of phenomenology and the question regarding transcendental language are main points of Eugen Fink’s influence on Jacques Derrida. If so, then “naivety” has been taken up merely as a description of the natural attitude subject to phenomenological reduction and has not been examined as an indicator in the development of Derrida’s thought. This paper traces the development of Derrida’s early interpretation of phenomenology, focusing on his attitude toward naivety as a marker accompanying Fink’s elaboration of transcendental phenomenology. First, I summarise Fink’s style as clarifying the level of transcendental reduction in Husserlian phenomenology. Next, I draw attention to the fact that in the 1950s, Derrida—while taking on Fink’s position with the rise of existentialist phenomenology—viewed the relationship between transcendentalism and facticity as a dialectical aporia. Subsequently, I show that this conception manifested itself as duplicity in terms of the language in the early 1960s. Finally, I discuss the prospect that this duplicity was the irreducible naivety of transcendental phenomenology and naivety without reserve, breaking through metaphysical thought and resulting in Derrida’s deconstructive strategy in the 1960s.

はじめに

ジャック・デリダが、古代から現代に至る西洋哲学における「現前」を真理の中心に据える態度を「現前の形而上学」と名指し、批判をおこなったことはよく知られている。デリダによる「現前の形而上学」批判は、「ロゴス中心主義批判」、「脱構築」といった他の語彙とともに、西洋哲学史に対する大胆な切り口として彼自身の哲学的態度を特徴づけている。そうしたデリダの態度はまず現象学研究に多くを負っている。さらに言えば、先行研究で指摘されてきたハイデガーの存在論の歴史の解体やレヴィナスによる存在論批判の影響にとどまらず、実存主義的現象学の潮流から距離をとりつつも、先行世代のフッサール解釈者らとの理論交渉から練り上げられている。本稿では、デリダの1950年代から1960年代にかけての「素朴さ」という主題の変遷を、とりわけオイゲン・フィンクによるフッサール解釈との比較を通じて、初期デリダの「形而上学」批判の射程とともに示すことを試みる。先行研究では、しばしばフィンクによる現象学的方法論的パラドックスの指摘や超越論的言語の問いの提起がデリダへ与えた影響が語られてきた。その際、「素朴さ」はあくまで現象学的還元の対象となる自然的態度を形容するものとして取り上げられ、

デリダの思索の変遷を辿る指標としては検討されてこなかった。本稿は、フィンクによる超越論的現象学の探究に同伴するデリダの「素朴さ」への態度をマークとして、初期デリダの現象学解釈の変遷を追うものである⁽¹⁾。

以下では、まずフィンクの立場をフッサール現象学における超越論的還元の水準を明確化するものとして整理する。次いで、1950年代のデリダが実存主義的現象学の隆盛のなかでフィンクの企図を引き受けつつ、超越論性と事実性の関係を弁証法的アポリアとして捉えていることに注目する。そして、このような着想が1960年代初頭に言語の主題における二重性として顕在化することを示す。終わりに、この二重性が超越論的現象学の還元不能な「素朴さ」であると同時に、形而上学的思考を突破する留保なき「素朴さ」として1960年代のデリダの脱構築的戦略に結実するという展望について述べる。

1. 自然的態度の「素朴さ」と超越論的態度の「素朴さ」

まずデリダの最初期の論考『フッサール哲学における発生の問題』（以下、『発生の問題』と略する）において参照されるフィンクのテキストから現象学の二つの「素朴さ」という視点を整理する。フィンクは1933年の「エトムント・フッサールの現象学的哲学と現代の批判」において、新カント派からのフッサール現象学に対する批判へ応答している。フィンクの応答の要点は、新カント派からの批判が超越論的水準と内世界的水準の区別を理解していないことに向けられている。フィンクは、新カント派からの現象学に対する「直観主義」、「存在論主義」、「論理主義」といった批判の一因が、現象学とカント主義が使用する語彙の類似にあるとしつつ、それらをまったく異なるものとして切り分けねばならないと主張する。この差分がフッサールの超越論的現象学とカントの超越論哲学の差異となるのである。

カントの超越論哲学は合理論と経験論を総合する、経験の可能性の条件の探究であり、経験に先立つア・プリオリを究明しようとするものである。そのため、カントは経験的なものと、経験の可能性の条件であるところの超越論的なものを峻別し、後者を超越論哲学の中心的主題とした。しかし、フィンクによれば、カントを範例とする批判主義は「経験に先立って存在者が相対的に前もって知られているという謎めいた先行性」を「ア・プリオリな世界形式」として説明するものであり（SP151/82頁）、ある「素朴さ」を免れえない。つまり、現象学的観点からカント主義的な「ア・プリオリ」は、あくまで自然的態度の地盤における「世界の先行的所与性」によって特徴づけられるのである（SP151/83頁）。

しかし、批判主義と異なり、現象学は世界の先行的所与性の解明にとどまるものではない（SP151/83頁）。なぜか。フィンクによれば、現象学は現象学的還元によって「内世界的なア・プリオリの構成的解明」をおこなう。周知の通り、フッサールは「事象そのものへ」というスローガンを掲げたが、これは「哲学以前の素朴性」を打ち出すものではない。

数学の基礎づけについての関心から研究をはじめたフッサールは、諸学の基礎づけを可能にする根本的な明証性を模索するなかで、対象の存在を「素朴に」前提する自然的態度において作用している存在定立を括弧入れし、超越論的主観性による世界の構成の場面をあらわにする現象学的還元という方法論を生み出した。現象学的方法論からすれば、独断主義的形而上学と経験論の乗り越えを図り、経験の可能性の条件を探求するために先立つア・プリオリをとりあげようとしたカントの超越論的哲学もあくまで自然的態度にとどまるものでしかない。むしろフィンクはカント主義的な超越論性そのものを現象学的還元によって問い直す作業こそがフッサールの超越論的現象学だと整理するのである。こうしたフィンクの注釈は、存在定立を前提とする自然的態度の素朴さを払拭し、真の超越論性を析出させようとする現象学的方法論の根本的性格に強い関心をもっていると言えよう。

ただし、フィンクはフッサールの無批判な継承者ではない。フィンクの現象学解釈の特徴は、フッサールの超越論的現象学の企図を評価しつつも、その「曖昧」な態度を「明確」にしようとする点にある。フィンクはフッサールの方法論的な不徹底に対する批判者として自身の立場を打ち出し⁽²⁾、1933年以降も現象学の改鑄を目指していった。フィンクは、たとえばデリダが参照する「志向的分析と、思弁的思考の問題」(1951)というテキストにおいて、「現象学的方法論的革命は無歴史的な〈素朴さ〉に基づいてはいはしないだろうか」と問うている (IS64-65/87頁)。このテキストでフィンクは「現象学運動」に対してさまざまな問題提起をおこなっている。本稿との関係で注目すべきなのは、フッサールが自然的態度を括弧入れしつつも、分析に先立って、あらかじめ基本的な「原様態」を温存しているのではないかという点である。原様態は「原範型」とも呼ばれるが、たとえばフッサールが時間意識や他者経験についての分析をおこなう際に、想起や過去、他者経験が、その志向的経験の変様として捉えられるところの知覚、今、自己といった基礎的な様態のことである。フィンクはフッサールの分析の起点となる先行的範型に「種々の思弁的な構想」が入り込んでいないのかと指摘し、現象学的還元を経てなお残る「無歴史的な〈素朴さ〉」ではないかと指摘するのである (IS79-80/97-98頁)。

整理しよう。まず素朴さとは、対象定立を前提とした自然的態度において指摘されるものであり、素朴な自然主義的態度に対して、超越論的態度を峻別する必要性が1933年の論文において主張されていた。1951年の論文では、その方法論的厳格さが、「無歴史的な」括弧付きの〈素朴さ〉、還元においてなお残る「原様態」の素朴さとして名指される⁽³⁾。そして、フィンクは、フッサールの志向的分析の素朴さを回避するために、超越論的態度それ自身に対する反省的審級、つまり「思弁的な思考」による批判が必要なのだと主張するのである。還元以前の自然的態度の「素朴さ」から距離をとった超越論的方法論の「素朴さ」に対して、さらに思弁的思考による批判を必要とするというフィンクの三元的構図は、1933年の論文から一貫性をもちつつ、素朴さから距離をとる純粋な理論的立場を希

求するものであるだろう。

2. 起源的なものと始原的なものの本源的弁証法

以上のようなフイック的な視点、つまり現象学が自然的態度の「素朴さ」から距離をとる一方で陥ってしまう超越論的態度の「素朴さ」に対する批判をせねばならないという態度は、実存主義的現象学による現象学受容以後に再度フッサールの超越論的現象学の批判的読解を試みるデリダの問題関心を準備している。デリダは『発生の問題』において、フッサール現象学の発生の過程を追うのだが、このテキストの序論においてデリダは著作全体を方向付ける「起源的なものl'originaire」と「始原的なものle primitif」の「本源的弁証法la primordial dialectique」という構図を提出する。「起源的なもの」とは、現象学的還元によって確保される超越論的現象学の方法論的な権利上の優先性であり、「始原的なもの」とは、現象学的還元「つねにすでに」先立って存在する自然的態度の事実上の先行性である。デリダは「起源的なもの」と「始原的なもの」の絡み合いこそがフッサール現象学の発生を駆動する本源的弁証法だと主張するが、このような問題設定は明らかに超越論性と内世界性の峻別の困難というフイックの解釈に大きな影響を受けている。

ただし、デリダは「始原的なもの」に対して「既在d'éjà-là」、「事実性」といったハイデガー的な用語を振り分けてもいる。これはデリダのフッサール読解が、フイック的な超越論的／自然的態度の対比に加えて、フッサールの超越論的現象学とハイデガー的な世界内存在の実存主義的解釈との対比のなかで、展開されていることを示すものである⁽⁴⁾。このようなデリダの解釈は1950年代のフランスにおける実存主義的現象学の隆盛という背景から理解されるだろう。諸学の基礎づけと、絶対的明証性の探求としてのフッサール現象学の企図に対しては、当初から観照主義的で理論的な態度だとして実存主義的思想潮流による批判がなされていた⁽⁵⁾。こうした批判は、フッサール現象学から、よりパトス的なハイデガーの実存主義的解釈へフランス知識人を導いた。たとえばデリダが『発生の問題』の参考文献に挙げているアルフォンス・ド・ヴァーレンスの「現象学から実存主義へ」(1947)では、フッサール現象学から、ハイデガーを経て、フランスにおける実存主義現象学への移行という時代の流れが指摘されている(de Waelhens 1947, p. 40)。そして、ド・ヴァーレンスが「現象学から実存主義へ」という流れのなかで、フッサールの超越論的現象学の企図とハイデガーの実存主義的解釈を早期の段階で方法論的に調停しようとした範例として示すのは、メルロ＝ポンティである。メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』冒頭で、「われわれにとっての現象学」を、フッサールの「人間と世界とを了解するために自然的態度の諸定立を中止しておくような超越論的哲学」であると同時にハイデガー的な「世界は反省以前に、廃棄できない現前としていつも〈既在〉であるとする哲学であり、[.....]世界とのあの素朴な接触をとり戻す」そうとするものだとしつつ、それらを融和

的なものとして捉えている⁽⁶⁾。

われわれは、超越論性の徹底というフインクの通路と、事実性との接触という実存主義的フランス現象学解釈のアマルガムとして最初期のデリダの着想を整理しよう⁽⁷⁾。デリダのフッサール読解の態度は、あくまで超越論的現象学を成立せしめる超越論性についての問いを徹底させることで、フランス現象学のアポリアを強調するものである。デリダは、サルトルによるフインクの思弁性への批判や、完全な現象学的還元は不可能であるというメルロ=ポンティのテーゼを明示的には引き受けない。むしろフインクのような超越論的現象学の方法論の追求をおこない、「本源的弁証法」のアポリアを提示しようとする。換言すれば、デリダは、フランスにおける実存主義的な雰囲気の中で、よりフッサールに対して忠実であろうとする態度を維持するために、「起源的なもの」の権利問題と「始原的なもの」の事実問題の交錯をフッサールのテキストの内部に読み込むことで、「弁証法的錯綜」の「本源性」をフッサール哲学の発生の過程と捉えるのである。

その上で、デリダがフインクと異なるのは、超越論的態度と自然的態度から分離される思弁的審級を設定しようとしなない点であるように思われる。むしろデリダは、フインクの思弁的解決に対して、「弁証法的絡み合い」に留まろうとするのである。このような絡み合いは、それ自体、フインクが強調する現象学の「パラドックス」にとどまる、という意味ではフインクの解釈を塗り替えるものではないが、フインクが注目したフッサール現象学のパラドックスの緊張をそのものとして引き受けようとするものだといえる。

「始原的なものと起源的なもの間の神秘的で本源的な弁証法がなければ、われわれは、始原的なものの起源的なものへの還元と、現象学的態度からの素朴な態度の発生とを想定するか[.....]、起源的なものから一切の尊厳を取り除いてしまうような単なる逆向きの「旋回」を想定するか、そのどちらかを選ばねばならなくなるだろう。どちらの場合も、超越論的なものと経験論的なもの間の区別が、そしてそれと共に絶対的基盤という希望の一切が、われわれから逃れ去る。フッサールの思想をその生成において調査することによってわれわれに提供されうる意味は、弁証法的な意味でしかありえないように思われる (PG20/23頁)。

デリダは、まずフインクによるフッサールの二種類の「素朴さ」、つまり自然的態度の素朴さと、超越論的態度に残る素朴さについての議論を引き受けているといえるが、ここで「始原的なもの」と「起源的なもの」の「絡み合い」はさしあたり「素朴」なものとは考えられていない。最初期のデリダは「思弁」を要請するフインクの発想に対して距離を取りながら自身の議論を構成している。

とはいえ、デリダは、この絡み合いをフインクと異なるかたちで引き受けているかとい

えば疑問の余地がある。『発生の問題』のち、デリダは1959年に「『発生と構造』と現象学」（以下、「発生と構造」と略する）を発表するが、その最終部で、自然的態度としての「素朴さ」でも、批判的「思弁」でもない審級として、フッサール現象学の可能性を取り出そうとしている（ED251/337頁）。デリダは、超越論的還元が「先立つものの全体性から身を引き剥がす問いの自由な行為」であると指摘しつつ、超越論的還元に対して、「超越論的還元の可能性についての問い」が、「無一意味の野生で裸の事実性の可能性」について問いかけるための「開け」あるいは「裂け目」だと述べている。「裸の事実性」という表現は、1962年の「幾何学の起源」「序説」においてもデリダがハイデガーの存在論を示唆するために用いているものである（OG169/255頁）。ここには修士論文の段階からハイデガー解釈を深化させ、単に自然的、経験的なものではないものとして超越論性に対する先行性であるところの事実性の領分をせり上げようとするデリダの態度が伺える⁽⁸⁾。しかし、このような構図は『発生の問題』と形式的には同型ではないだろうか。デリダは、フッサールの「超越論的還元」、ハイデガー的な「裸の事実性」のあいだに「裂け目」の次元をみだしているが（ED251/338頁）、これは先に見たような「起源的なもの」と「始原的なもの」の本源的弁証法という構図が「発生の問題」から引き継がれているものと考えられる。しかし、この1953-54年の「神秘的で本源的な弁証法」あるいは、1959年の「裂け目」、「開け」という視点には、自然的／超越論的な二重の素朴さから距離をとるフィンの批判的思弁から、なお距離を取ろうというデリダの意図は見出されるものの、その思考の形式性（始原性／起源性／本源性および超越論性／事実性／裂け目）において、結局のところ、フィンの三元的整理（自然的／超越論的／思弁的）における批判的思弁とあまりに似通っている。「神秘的」、「裂け目」といった表現をもちいる1950年代のデリダは問いを先鋭化させつつも、その着想を具体的なかたちで文節するに至っていないのではないか。デリダの着想が具体化されるのは、むしろ「素朴さ」を捉え返す、1960年代の新たなテキストを待たねばならない。

3. 曖昧な超越論的言語

1950年代末のデリダは、「事実性」解釈を深化させつつ、「素朴」でも「思弁」でもない第三の審級を導入しようとしていたが、1960年代のデリダはこれを再度「素朴さ」とともに検討する。ここで重要になるのは「言語」の主題である。デリダは1962年に出版された「幾何学の起源」の仏訳に付した長大な序説（以下、「序説」と略する）において、1959年にフィンが発表した「フッサール現象学における操作的概念」を参照し、フッサール解釈において提起される「言語」の身分へ注目するのである⁽⁹⁾。

まずフィンの議論を必要な範囲で確認する。フィンは「操作的概念」論文において、フッサール現象学のうちに「素朴性の破砕が読みとられうるのだとするなら[.....]あまり

にも単純にすぎる理解」だと指摘し、むしろフッサール現象学が「素朴性そのものを思惟しつつ考察する」ものであることを強調する（CO222/33頁）。フィンクは主題的概念と操作的概念という視点を導入し、このことを説明している。「主題的」概念とは、たとえばプラトンにおける「イデア」やフッサールの「超越論的主観性」のように哲学の概念形成が目指しているところの当のものであり、「緊張全体をうちに含んでいる」概念である。これに対して「操作的」概念とは、主題的概念を形成する際に使用されている別の概念や思考モデルであり、日頃使いこなされているがゆえに焦点化されることのない「哲学の影」である（CO218/27頁）。フィンクは、フッサールが「主題と操作との区別を用いて「操作している」だけでなく、たとえば「素朴性と反省」、「自然的態度」と「超越論的態度」という用語を用いること」で主題的なものと非主題的なものの区別をも明確に「主題にしている」のだと述べる（CO223/34頁）。この主題化と操作の転換に素朴性そのものを思惟しつつ考察する現象学の繊細さをフィンクはみてとっている⁽¹⁰⁾。

現象学における原範型を再検討する方法論を、単に超越論的思考の場所を確保するのではなく、まさしく自然的態度と超越論的態度の絡み合いのなかで取り出そうとする、フィンクの1950年代末の主張は、彼のフッサール読解の深化を示すが、しかし、フィンクはあくまでフッサールの試みをいまだ完全ではないとみている。その争点は「言語」である。「操作的概念」論文においてフィンクは、フッサールが彼の繊細な分析にもかかわらず「超越論的言語」の問いを立てなかったことを問題視する。[[.....]フッサールが超越論的「相互主観性」の自己意識を、物にかかわっている普遍的な対象意識から区切るために、極度に重要な、繊細を極めた分析をおこなっているにもかかわらず、この自己意識は構成－概念の十分なる明るさに達していないのである。このことはおそらくフッサールが「超越論的言語langage transcendantal」の問題を自分で立てなかったことにもっとも深い理由をもっている」（CO229/41頁）。フィンクは「操作的概念」論文において、いくつかの表現でフッサールにおける言語の問題の不備を指摘するが、これは1933年の論文で主張した、超越論的分析が自然的言語によって言い表される「現象学的命題のパラドックス」を、「超越論的言語」という方法論的課題として再提起するものであろう。

デリダは「序説」においてフィンクを参照しつつ、「言語」がフッサールにおける「無歴史的「素朴さ」」ではないかと指摘しているが（Cf. OG61/104頁）、デリダの態度を見極めるためにフィンクへの参照の仕方を追っておきたい。デリダはフィンクの主張を、フッサールにおける「超越論的言語」の問いの不在を指摘しつつ、超越論的記述にふさわしく、自然的態度と素朴さから逃れうる「超越論的言説discours transcendantal」の必要を提起したのものとして、「言語」と「言説」を区別しつつ整理している（OG71/121頁）⁽¹¹⁾。複数の表現で言語の問題の不徹底を指摘するフィンクには些かの躊躇いがあり、デリダの整理はかなり積極的なものにもみえる。しかし、それゆえにこそ、「言語」と「言説」の

区別はデリダの視点を明確化するだろう⁽¹²⁾。デリダは、最晩年のフッサールに言語の問いを見出しつつ、さらにそれを超越論的記述のための言説へ洗練させようとする態度から峻別するために、「素朴さ」の乗り越えを志向するフィンク的な観点を際立たせているのである。デリダは「超越論的言説がある曖昧な世界内性によってかき消されたまま」であることが1933年の論文においてフィンクによって強調された困難であると指摘し(OG60/93, 101頁)、その上で、あくまでフッサールの超越論的企てと素朴さの曖昧さをもった「超越論的言説」の問題を維持する。こうした「序説」の指摘は「発生と構造」とは異なり、「曖昧さ」のうちに最初期の弁証法的絡み合いを受肉させることで、晩年のフッサールを超越論的現象学の臨界点として再評価するものであろう⁽¹³⁾。換言すれば、1959年に自身が切り離れた「素朴さ」を不可避的なものとして再検討するデリダの態度が見出せるのである。そして、デリダは1964年に発表された「暴力と形而上学」において、言語の超越論的／自然的な曖昧さを、哲学が受け入れなければならない根底的な二重性であると記述することになる(ED167/221-222頁)。このようなデリダの記述は本稿で述べてきたフィンクによるフッサール解釈との対比から要請されてきたものとして理解できるだろう。

「日常生活の言語と哲学的言語、さらには、いくつかの歴史的言語と哲学的言語とのあいだには、哲学者がどれほど修辞の面で努力しようとも共犯関係が残るのだが、この還元不能な共犯関係を[.....]熟考しなければならないだろう。そうするなら根絶やしできないある種の自然性、哲学的言語のある種の起源的素朴さが、各々の思弁的概念に関して実証されうるだろう[.....]。哲学的言語は(諸)言語のシステムに属している。非一思弁的な出自によってこのように思弁のなかに移入されること、それは常にある種の曖昧さ[équivocité]であるから、おそらく、哲学はこの曖昧さを引き受け、それを志向し、この曖昧さの中で自己を思考しなければならず、また哲学は、思弁における、哲学的意味の純粹さそのものにおける二重性と差異を受け入れなければならない」(ED167/221-222頁、下線部強調引用者)。

フィンクの議論の方向性が端的に克服すべきものとして「素朴さ」を提示するのに対して、デリダは二重性にまともにつき「素朴さ」が、ある思考の突破口を示すものであるようにも記述している。素朴さは究極的には還元されるべき影ではなく、デリダにとっては、むしろこの「素朴さ」が超越論的企図に対して変形を強いるようなものでありうるのである。

おわりに——突破口の留保なき「素朴さ」へ

まとめよう。まず本稿は現象学的還元をその中心に据え、自然的態度と超越論的態度を

峻別しようとするフィンクの解釈をとりあげ、そのフランスでの受容を経由したデリダへの影響を整理した。フィンクが超越論的態度と自然的態度の絡み合いを現象学の根本的困難だとみなし、純粋な超越論性を確保する方途を模索するのに対して、デリダはその絡み合い自体を本源的位相としてとりあげる。そして、1960年代以降のデリダは「言語」の不可避的曖昧さを哲学が引き受けるべき起点として捉え直し、分析の領域を拡大していった。そして、そのような拡大は形而上学に対する根底的批判を可能にする起源的「素朴さ」というデリダの逆説的な戦略に結実したのである⁽¹⁴⁾。

デリダは自身の戦略を、後年、「突破口の「素朴さ」と呼び、形而上学の揺り動かしの一契機として見定めている（DG32/上47-48頁）。本稿が述べてきたように、権利上先行する超越論的現象学のプログラムに、事実上の言語的課題は起源的に絡み合っており、それゆえに事実性の分析はそれ自体で超越論的現象学のプログラムの問い直しの契機として立ち上がってくる⁽¹⁵⁾。この超越論的哲学を問い直す留保なき素朴さこそ、デリダがフィンクによる超越論的現象学の徹底という企図に伴走しつつ、知の「絶対的な異邦性」へ向かうために練り上げたパースペクティブであるといえる（Cf.DG32/上47-48頁）。ただし超越論的経験を記述するために通過せねばならない「素朴さ」は、哲学的言説が前提とし、問うことのない範型を温存するような「形而上学」と切り離されてはいない。この表裏の危険こそ1960年代の「現前の形而上学」批判の前提となるデリダの哲学的態度を印づけるものであり、それ自体、フッサール現象学の遺産相続の試みなのである⁽¹⁶⁾。

注：テキストの引用に際して、以下の略号を用い、続けて、原著頁数と、邦訳を引用する場合には対応する邦訳頁数を記す。例えば（OG14/15頁）。邦訳引用については一部引用者による表記変更をおこなった。引用中[.....]は省略を表す。Jacques Derridaの著作：PG=*Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF, 1990（『フッサール哲学における発生の問題』合田正人・荒金直人訳、みすず書房、2007年）；OG=*L'origine de la géométrie* d'Edmund Husserl, traduction et introduction par Jacques Derrida, PUF, 1962（『幾何学の起源』田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、1988年）；ED=*L'écriture et la différence*, Seuil, 1967（『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年）；DG=*De la grammatologie*, Minuit, 1967（『根源の彼方に グラマトロジーについて』上、足立和浩訳、現代思潮社、1972年）。Eugen Finkの著作：SP=*Studien zur Phänomenologie 1930-1939*, Martinus Nijhoff, 1966（『フッサールの現象学』新田義弘・小池稔訳、以文社、1982年）；IS= « L'analyse intentionnelle et le problème de la pensée speculative », in *Problèmes actuels de la phénoménologie*, in H. L. Van Breda (éd), Desclée de Brouwer, 1952, pp. 53-87（『志向的分析と、思弁的思考の問題』『現象学の課題』高橋允昭訳、せりか書房、1969年、pp. 79-105）；CO = « Les concepts opératoires dans la phénoménologie de Husserl », *Cahiers de Royaumont Philosophie*, n° 3, Minuit, 1959, pp. 214-241（『フッサール現象学における操作的概念』新田義弘訳、『現象学の根本問題』新田義弘・小川侃編、晃洋書房、1978年、pp. 21-44）

- (1) 本稿は、デリダの現象学解釈へのフィンクの影響関係を、デリダが言及したフィンクのテキストあるいはフィンクの影響下にあったフランス現象学受容の文脈を踏まえながら、検討する。それゆえ、フィンクの死後に出版された『第六デカルト的省察』や、デリダが明示的に言及していない「素朴さ」の克服としての哲学(1948)といったテキスト、またデリダが言及しているが狭義の現象学解釈を超える『世界の象徴としての遊戯』のようなテキストは中心的にはあつかわない。
- (2) たとえば「現代の批判」論文において、フィンクは現象学の根本的な困難を、現象学的還元が自然的態度のうちに開始しつつ自然的態度から脱出せねばならないという回避できない事態にみとり (SP129/58頁)、三つの範例的なパラドックス(「表明の状況のパラドックス」(SP153/85頁)、「現象学的命題のパラドックス」(SP154/86頁)、「超越論的諸規定の論理的なパラドックス」(SP155/87頁)として整理している。いずれも超越論的態度と自然的態度のあいだの不可避的な交錯が問題とされている。フィンクはこれらを「現象学全体に付随している根絶し難い「超越論的仮象」であるとし、現象学と批判主義を峻別しつつ、後者による現象学の問題の明確化を図ろうとするのである。
- (3) フィンクは1930年代初頭に執筆され、没後出版された『第六デカルト的省察』においても「世界素朴性Weltnaivität」／「超越論的素朴性」、「自然的素朴さ」／「現象学的素朴さ」といった表現で区別されるべき二段階の素朴さについて記述している (Fink 1988, p. 5/5頁, p. 81/73, 163-164頁)。
- (4) 「発生」という主題については、デリダが度々その負債を証言するとおり、「起源的構成」の問題について未刊草稿を交えて検討をおこなったトラン・デュク・タオの『現象学と弁証法的唯物論』からの影響が大きい。ただし、タオはマルクス主義的弁証法の視点からハイデガーを「死への自由」という絶対的恣意を主張する「証明の欠如そのもの」として強く批判する。ハイデガーの実存主義をブルジョワ哲学とみなしつつ、フッサールの合理主義とマルクス主義的唯物論の混成によって抵抗するというタオの視点自体はデリダの理論構成には見出しにくいものである (Cf. Thao 2012, pp.11-12)。
- (5) Cf. Chestov and B.de Schloerzer (1926) . またサルトルは『自我の超越』(1937)において、権利問題ではなく前反省的領野を事実問題として記述する重要性を主張し、現象学的還元の際して三つの自我解釈を導入するフィンクの思弁的な解釈を批判している (Sartre 1966, p.36)。
- (6) Merleau-Ponty 1945, p. i. デリダは生活世界論へ現象学的企図を収斂させようとするメルロ＝ポンティやド・ヴァーレンスに代表される解釈に対しては批判的だったが、メルロ＝ポンティとの対話は、初期の人類学、構造主義言語学や「知覚の現象学」との対決から晩年の「触覚中心主義」批判までデリダの終生の課題であり続けた (Cf. Derrida 2000)。フィンクとメルロ＝ポンティの方法論的關係に関しては以下も佐野 (2019) も参照。
- (7) Kateはデリダが「発生と構造」においてフッサールのヒュレーの与件よりもハイデガーの死の根底的事実性を狙おうとする点に『発生の問題』から「発生と構造」へ向かう主要な変化を指摘する (Kate 2005, pp. 251-252)。ただしハイデガー存在論とフッサール現象学との弁証法的關係の起源を「発生と構造」にみるKateの主張に対して、本稿は最初期からの実存主義的現象学受容を考慮する必要を指摘する。またこれに関連してレヴィナスはハイデガーの不安における現存在を「自己の実存の裸の可能性」と評している (Levinas 1967, p.74)。

- (8) ただしハイデガー/メルロ＝ポンティ的な時間論から影響を受けつつ、本源的弁証法は「あらゆる発生とあらゆる意味作用の根拠づけとしての存在と時間の起源的総合」(PG41/46頁)という時間性の問いへ展開する。この点については以下も亀井(2019)、松田(2020)も参照。
- (9) フィンク版とは異なり、「序説」でデリダが参考にした「幾何学の起源」のHusseliana版には言語についての記述が含まれており、デリダの態度変更へつながっている(Cf. 亀井2018; 小川2019)。
- (10) Terziは、フィンクの操作的/主題的の区別が、初期フッサール研究のみならず、「代補」、「パルマコン」、「パレルゴン」といった、1960年代後半以降のデリダが哲学史読解の際に用いた実践的戦略へ影響を与えていると指摘する(Terzi 2018, p.12)。
- (11) LawlerおよびKateは、初期デリダの理論形成におけるフィンクの重要性を指摘し、前者はタオ、カヴァイエスからの影響と並んで発生の問題から立ち上がるパラドックスを見出そうとしており、後者は言語とエクリチュールが超越論的なものと世界内的な経験性の両方を表象するものと適切に主張している(Cf. Lawlor 2002, p. 21; Kate 2005, pp. 43-44)。ただし、これらの先行研究はパラドックスの思弁的解決に対する忌避感というデリダのフィンクに対する緊張関係あるいはフッサールへの忠実さを見逃している。

LawlerおよびKateは前掲書においてデリダが「幾何学の起源」においてフィンクによって提起された「超越論的言語」の問いを深めていると指摘するが、「序説」における「超越論的言語」と「超越論的言説」の区別を見落としており、フィンク的な議論の方向性に対する緊張関係が読み取られることがない。

- (12) フィンクによる超越論的現象学における言語の身分の検討自体は「現代の批判」論文、『第六デカルト的省察』といった1930年代の著作から完全な超越論的言説の不可能性として議論されていた。しかし、その後、現象学の限界を指摘しつつ、思弁へと歩を進めるフィンクの態度はむしろ限界概念としての「超越論的言説」をデリダへ読み取らせたのではないだろうか。また当時の資料状況からデリダにとって『第六デカルト的省察』を直接読むことは困難であったが、「序説」以後のデリダの方向性は「方法論的素朴さ」(Fink 1988, p. 106/92)へ向かったフィンクの議論へ再接近するようにも思われる。デリダは1960年代半ば以降も「脱現前化」や「遊戯」といった重要なモチーフをフィンクから引き出していくこととなるが、フィンク哲学全体との比較については稿を改めたい(Cf. Derrida 1966a, p. 27; Derrida 1966b, p. 549)。
- (13) デリダは「超越論的企て」が「言語の還元不可能な事実性と自然的な素朴さ」に「傷つけられうる」ことの重要性を指摘し、「超越論的遡行そのものの可能性にかんする二次的反省」が「必然的に思弁的なスタイル」をもつと記しているが、ここで、超越論的/自然/思弁の区別は互いに排他的ではなく、むしろ重なり合っている(OG61/103)。

また、こうした言語の曖昧な身分を重視するデリダの解釈は、超越論的哲学としての現象学の可能性を追求する先行者によるフッサールの言語論に対する批判的解釈を受けてもいるだろう。たとえばデリダが参照する『形式的論理学と超越論的論理学』の仏訳者であるシュザンヌ・バジュラルは、そもそも言語活動の水準そのものが「現象学的還元は無知であり、われわれを自然的態度に服させる」と主張し、言語活動を超越し、志向的生の分析へ向かう哲学としてフッサール現象学を解釈していた(Cf. Bachelard 1957, pp.14-15; OG60/101-102頁)。このようなフッサール現象学解釈は、さきに言及した『発生の問題』における後期フッサール解釈についても影響を与えていたものと思われる。長坂は、フィンク由来の「超越論的言語」の主題の

展開を『声と現象』における表現の問題に指摘している（長坂 2015, p. 113）。

(14) 本稿が検討してきたフッサール、フィンク、デリダの対話の場は、今日の現象学研究の動向に対しても外的なものではなく、今日の現象学的記述がもつ鉤括弧付きの「逆説的な素朴さ」を再考することを促すものではないだろうか。稲垣は、フィンクによる「操作」という観点を検討した上で（稲垣2018, pp.131-150）、近年のケアの現象学の潮流を現象学的な自然さという意味での「素朴さ」という観点から批判的に論じているが、本稿で論じた「突破口としての素朴さ」、その危険とは何か、という視点から改めて検討できるだろう（Cf. 稲垣 2020）。またスピヴァクは、デリダのグラマトロジーの企図が単なる経験主義を超越するものではなく、「経験主義的調査研究」の場合と同様、「『実例』をとおして作業を進める」ことが要求されるのだと適切に整理しているが（Spivak 1988, p. 88）、あくまで実例と超越論的現象学の緊張関係としてデリダのプロジェクトは読み解かれるべきであろう。また、このような議論の形式は現象学読解を超えてアントナン・アルトーに対する読解にも適用されている（ED291/396-397頁）。デリダのアルトー読解における形而上学の位置については、松田前掲書第四章も参照のこと。

(15) このような観点は、超越論的プログラムからみて「素朴に」みられる領域存在論や経験諸科学の再検討をデリダに促すものである。デリダは『グラマトロジーについて』において、ハイデガーの「存在への問い」が古い言語学に囚われているのではないのかと問いかけ（DG34/上50頁）、むしろ最新の経験諸科学（デリダがあげるのは記号学と精神分析である）を組み尽くし、超越論的哲学、基礎存在論を問い直そうとする試みとしてグラマトロジーの構想を検討していた（Cf. DG89/上121-122頁）。これについても他の学問領域と超越論哲学との関係を積極的に問うたメルロ＝ポンティとの関係が再度精査されるべきであろう。メルロ＝ポンティは『行動の構造』や『知覚の現象学』においてゲシュタルト心理学を、また構造主義言語学や文化人類学といった同時代的な学問の成果を利用してはいたが、そうした態度を基本的にはデリダも共有しているように思われる。デリダのソシュール、レヴィ＝ストロースへの批判もメルロ＝ポンティの現象学以後にいかに関現象学をおこなうのか、という点に関して忠実な身振りでありうるのである。

(16) 本稿以後のいくつかの課題を示しておく。まず本稿は現象学的枠組みによってデリダの1950～60年代の思索を検討したが、デリダは、『グラマトロジーについて』においては、すでにフッサール、ハイデガー、フィンクに対する批判として、或る留保なきニーチェ主義を語るようになる。こうしたデリダの戦略は、本稿の整理によってはじめて理解可能になるがその内実については稿を改めたい。

また、起源的曖昧さについてのデリダの議論は、メルロ＝ポンティのフッサール解釈に再接近しているように思われるかもしれない。メルロ＝ポンティは、現象学的還元の不完全さをその不可能性において捉えていた。先行研究では、しばしばメルロ＝ポンティに代表される後期フッサールの生活世界論を評価するフッサール解釈に対するデリダの距離感が強調されてきたが、本稿で検討された括弧付きの素朴さという論点とともに、その内実において再検討される必要があるだろう。上記の論点は、「知覚」の理論的位置をめぐる議論に収斂し、デリダの「現前の形而上学」批判の核心となるが、これについても本稿の範囲を超えるため論じることではできない。

以上の論点は、デリダの指導教員ジャン・イポリットによるヘーゲル読解、つまり経験的思考を通過した「もはや素朴さのひとつではありえない素朴性への回帰」としての思弁的思考と

の関連からも再検討できるだろう (Hyppolite 1961, p. 138)。デリダはしばしばカント主義への批判者としてフッサールとヘーゲル主義との親近性を述べるのだが (PG12/13)、イポリットは現象学とヘーゲル哲学との関連を実存主義的現象学の興隆に同伴しつつ、思考し続けた人物であった。イポリットによれば、ヘーゲルの思弁的思考は、「素朴な思考としてドグマティックであり、超越論的思考として批判的である」(Hyppolite 1961, p.109)。デリダの1960年代後半のヘーゲル読解は、「素朴で、自然な意識」(Hyppolite 1961, p.71)としての経験論を乗り越えようとするカント的批判主義を乗り越えるものとして、「還元」(Hyppolite 1961, p.177)をおこなうヘーゲルの思弁的思考を捉えようとしたイポリットの試みと、フィンクの現象学読解を総合するものであるといえる。

文献

- Bachelard, Suzanne. (1957) *La logique de Husserl: Étude sur Logique formelle et logique transcendante*, PUF.
- Chestov, Léon and B.de Schlözer. (1926) « Memento mori-Apropos de la théorie de la connaissance de Husserl », *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, PUF, pp. 5-62.
- Derrida, Jacques. (1966a) « De la grammatologie », in *Critique*, 22 (224), Minuit, pp. 23-53.
- . (1966b) « Reviewed Work(s): Studien zur Phänomenologie, 1930—1939, La Haye, « Phenomenologica », (21) by Eugen Fink », *Les Études philosophiques*, No. 4, PUF, pp. 549-550
- . (1967a) *L'écriture et la différence*, Seuil. (『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年)
- . (1967b) *De la grammatologie*, Minuit. (『根源の彼方に グラマトロジーについて』上、足立和浩訳、現代思潮社、1972年)
- . (1990) *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF. (『フッサール哲学における発生の問題』合田正人・荒金直人訳、みすず書房、2007年)
- . (2000) *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Galilée.
- de Waelhens, Alphonse. (1947) « De la phénoménologie à l'existentialisme », in *Le choix-le monde-l'existence*, B. Arthaud, pp. 37-70.
- Fink, Eugen. (1952) « L'analyse intentionnelle et le problème de la pensée speculative », in *Problèmes actuels de la phénoménologie*, in H. L.Van Breda (éd) , Desclée de Brouwer, pp. 53-87. (『志向的分析と、思弁的思考の問題』『現象学の課題』高橋允昭訳、せりか書房、1969年、pp. 79-105)
- . (1959) « Les concepts opératoires dans la phénoménologie de Husserl », *Cahiers de Royaumont Philosophie*, n° 3, Minuit, pp. 214-241. (『フッサール現象学における操作的概念』新田義弘訳、『現象学の根本問題』新田義弘・小川侃編、晃洋書房、1978年、pp. 21-44)
- . (1966) *Studien zur Phänomenologie 1930-1939*, Martinus Nijhoff. (『フッサールの現象学』新田義弘・小池稔訳、以文社、1982年)
- . (1988) *VI. Cartesianische Meditation Teil 1 DIE IDEE EINER TRANSZENDENTALEN METHODENLEHRE Texte aus dem Nachlass Eugen Finks (1932) mit Anmerkungen und Beilagen aus dem Nachlass Edmund Husserls (1933/34)*, Herausgegeben von Hans Ebeling, Jann Holl und Guy van Kerckhoven, Kuluwer Academic Punlisher. (『超越論的方法の理念』

- 新田義弘・千田義光訳、1995年、岩波書店)
- Husserl, Edmund. (1962) *L'origine de la géométrie* d'Edmund Husserl, traduction et introduction par Jacques Derrida, PUF. (『幾何学の起源』 田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、1988年)
- Hyppolite, Jean. (1961) *Logique et existence; essai sur la logique de Hegel*, PUF.
- Kate, Joshua (2005) *Essential History: Jacques Derrida and the Development of Deconstruction*, Northwestern University Press.
- Lawlor, Leonard (2002) *Derrida and Husserl, The Basic Problem of Phenomenology*, Indiana University Press.
- Levinas, Emmanuel. (1967) *En découvrant l'existence avec Husserl et Heidegger*, Vrin.
- Merleau-Ponty, Maurice. (1945) *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.
- Sartre, Jean-Paul. (1966) *La transcendance de l'ego esquisse d'une description phénoménologique*, Vrin.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. (1988) "Can the Subaltern speak?", in Cary Nelson and Lawrence Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press.
- Terzi, Pietro. (2018) "The Relevance of Fink's Notion of Operative Concepts for Derrida's Deconstruction", *The Journal of the British Society for Phenomenology*, Volume 50, pp.50-67, <https://doi.org/10.1080/00071773.2018.1501968>.
- Thao, Tran Duc. (2012) *De Husserl à Marx Phénoménologie et matérialisme dialectique*, Éditions Delga.
- 稲垣諭 (2018) 『壊れながら立ち上がり続ける個の変容の哲学』 青土社。
- 稲垣諭 (2020) 「ありのままの生とインタビュー中心主義の帰趨——「ケアの現象学」の素朴さが映すもの」『実存思想論集』XXXV、実存思想協会、pp. 53-74。
- 小川歩人 (2019) 「デリダ『幾何学の起源』「序説」における「文学的对象の理念性」の在処」『フランス哲学・思想研究』、24号、日仏哲学会、pp. 107-118。
- 佐野泰之 (2019) 『身体黒魔術、言語白魔術メルロ＝ポンティにおける言語と実存』、ナカニシヤ出版。
- 亀井大輔 (2018) 「『フッサール「幾何学の起源」講義』——デリダとの読解との対比を通じて」『メルロ＝ポンティ読本』 松葉祥一・本郷均・廣瀬浩司編、法政大学出版局、pp. 300-309。
- 亀井大輔 (2019) 『デリダ歴史の思考』 法政大学出版局、2019年。
- 長坂真澄 (2015) 「知の不可能性において語る声 ジャック・デリダ『声と現象』再読」『宗教哲学研究』、32巻、宗教哲学会、pp. 109-122。
- 松田智裕 (2020) 『弁証法、戦争、解読:前期デリダ思想の展開史』、法政大学出版局。

(小川 歩人・おがわ あゆと・大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構)